

〈共同研究報告〉

社会福祉援助技術学習の支援方法開発をめぐる研究

——生活コスモスのビジュアル化と生活支援過程学習の訓練——

太田 義 弘*・中村 佐 織**・長 澤 真由子***

Research for the Development of Skill Learning Method in Social Work Practice

Yoshihiro Ohta, Saori Nakamura and Mayuko Nagasawa

要旨：本共同研究のねらいは、社会福祉教育を受けている学生の支援スキル訓練を促進することにある。エコスキャナーと称するコンピュータ支援ツールを用いることによって、人と環境からなる社会生活に対する知識や視野を広げること、それはソーシャルワーカーとして利用者の生活を支援するために必要なことである。他方では、利用者の生活世界を理解するため支援スキルの効果的訓練をねらっている。エコスキャナーを用いて事例研究をした後で、われわれは2大学の学部学生と1大学院の院生を対象にして、110名の学生に調査を実施してきた。そしてコンピュータ・シミュレーションによって科学的かつ専門的な実践についての評価を得ることができた。エコスキャナーは、利用者自身の固有な生活世界（コスモス）をビジュアル化した図表にまとめることで、エコシステム構想を用いて利用者の生きざまとしての生活を理解し、支援することについて学生に役立つ支援ツールである。

本論文の内容は、以下のような項目から成り立っている。

- I はじめに
- II 社会福祉実践教育への視野と試行
- III 社会福祉援助技術教育への構想と方法
- IV 社会福祉実践教育の実際と評価
- V おわりに

Abstract : The purpose of this joint research is aimed at promoting skill training for social work students. By using a computer as support tool called “Ecoscanner”, it is for extending the knowledge and view to social human life involving clients and their environment which a social worker needs in order to enhance their lives. On the other hand, it is trying to aim at effective skill training for understanding life world (cosmos) of clients. After case study by using Ecoscanner, we have investigated for a total of 110 students at two schools (under-graduate) and a graduate school. We have been able to get the evaluation about scientific and specialized practice by computer simulation. Ecoscanner helps students in understanding and enhancing the real life of clients using Ecosystem Project by summarizing the

*関西福祉科学大学社会福祉学部 教授

**京都府立大学福祉社会学部 教授

***広島国際大学医療福祉学部 講師（前関西福祉科学大学社会福祉学部 講師）

own life world of clients on the chart made visual.

The contents of this article are as follow :

- I Introduction
- II View and trial for social work education
- III Project and method of social work skill training
- IV Training and evaluation of social work skill training
- V Conclusion

Key words : 社会福祉援助技術学習 social work skill training 生活コスモス life cosmos
生活支援過程 life enhancement process エコシステム構想 ecosystem projects
エコスカナー ecoscanner

I はじめに

社会福祉援助技術とは、伝統的に用いられてきたソーシャルワークの邦訳である。これは欧米において 100 年余りの伝統をもつ専門用語である。しかし残念なことに、わが国では社会福祉という曖昧な用語の陰で固有な専門用語として共通理解を得るには至っていない。社会福祉士をはじめ各種の社会福祉サービスの提供をめぐって制度化された資格制度とともに、そこで実施される対人サービスの総称として社会福祉援助技術が重宝に用いられ、利用者対応への how to もの顧客マナーのような誤解を受けてきている。

ソーシャルワークは、利用者の固有な生活コスモス（人と環境から構成される独自の世界）を基盤にして、包括・統合的な視野や発想で課題の解決や自己実現を支援する方法である。その目標を有効・適切に推進するため一方では、広く社会サービスを開発・提供し、利用者との参加と協働のもとに支援過程を追求することから、固有な支援科学であると考えられている。そのために利用者の生活コスモスを科学的に把握し、利用者との支援という協働過程を積み上げ、問題状況の改善や目標の達成を実現する実践理論と科学的な方法を兼ね備えた専門的な実践行動概念がソーシャルワークである。

昨今の社会福祉士養成教育に期待される課題は、その時代を反映した社会福祉施策を利用者

の生活のなかに実現する実践活動、つまりソーシャルワーク実践の重要性に関心や焦点が移行してきており、実践行動力をもった人材の輩出に向けられてきている。そして善意や勤と経験のみに依拠した実践から、利用者との参加と協働のもとに支援過程の展開を科学的に推進できる経験や実力をトレーニングすることが焦眉の急を要する課題となってきた。そこで社会福祉士養成でのソーシャルワーク実践教育を刷新しようと、生活支援方法の科学化と専門化にコンピュータの導入を企図してきた。事例研究などをバーチャルな世界で経験し、利用者の変容過程や対応するソーシャルワーカーとしての実践力を点検・評価しながら、支援方法を培う試みが研究の目指すところである。

特に本研究は、教育支援ツールの開発と同時に、これを用いて社会福祉専攻学生に対するソーシャルワーク実践教育を科学的かつ効果的に推進しようとするもので、専門的で臨場感に満ちた臨床福祉教育の方法を展開しながら、さらに利用者支援への価値や知識さらに技術からなる実践能力の養成を目指そうとしたものである。

II 社会福祉実践教育への視野と試行

1. ソーシャルワークに迫る状況

最近のソーシャルワークの重要性を再認識する動向は、長らくソーシャルワーク実践研究にかかわってきたものにとっては、当然のことと

理解しているが、逆にその反動で安易な用語の横行から、歴史的なソーシャルワークという用語にこめられた意図が曲解されないかと懸念している。ケースワークやケアマネジメントさらにカウンセリングという用語が、具体的サービスや行動をイメージさせるのに対して、ソーシャルワークが実践や方法・技術を総称する用語として乱用され概念がかすんでくるような気がしてならないからである。

ソーシャルワーク概念は、もともと壮大な視野と発想をもっているために、時代が進展し人びとの暮らしやニーズの変貌に対応して、その方法や技術の専門性が厳しく問われてきた。そして多様な実践フィールドや隣接諸科学と切磋琢磨するなかで伝統的方法へと分化することによって専門性を確立し利用者のニーズに応えてきた歴史がある。

特に1960年代から米国のソーシャルワークは、社会状況の激変と価値の多様化や新しい貧困問題に対応することから、固有な視野や発想さらに方法や技術を磨き、専門性や不可欠な職業としての地位を確立してきた。そして他方では科学技術の進展で専門職業が利用者を中心にボーダレス化するなかで、ソーシャルワークの原点を再認識しながら、利用者にもっとも身近な生活支援という活動を展開し、その成果を不動のものにしてきた経緯がある。

それに対して、このところのわが国の動向は、社会福祉諸制度の整備と拡充にしたがって、社会福祉サービスの供給をめぐる便法として社会福祉援助技術と称する技法が独り歩きし、ソーシャルワークという原点を無視した取り扱い手続きに逸脱してきている。社会福祉の普遍化は、ソーシャルワークの存在を否定するような動向で侵食してきており、つまみ食いされた便法が専門化を霧散させ、商業化の台頭を容易にし、社会福祉サービス販売への集客取り扱いマニュアルへと化身をしてきている。

ソーシャルワークは、その本来の特性を剥奪され、社会福祉の商業化とともに顧客確保への

対人接遇マナーに追いやられる危機に直面しているといっても過言でない。ソーシャルワークという専門用語が実践活動概念として定着するには、次々と出現する問題への対応とともに、次のような今日的な状況や課題を十分意識しておかなければならない。

- (1) 医療・看護・心理領域から生活支援活動への積極的アプローチ
- (2) 法科大学院構想にみる Social Care Lawyer 教育への取り組み
- (3) ソーシャルワークが社会福祉援助技術という用語でイメージされている現実
- (4) 社会福祉援助技術を体系的に分化して構成・理解する社会福祉教育
- (5) 生活支援という固有特性の一部を抽出したサービス給付手続機能の資格制度化
- (6) ソーシャルワーク固有概念の共通理解と実践への独自の科学的方法の確立

などである。

これらは当然のことながら、特に社会福祉教育にかかわるものにとってソーシャルワークの固有性に迫りくる厳しい現実であり、克服しなければならない課題である。すでに(3)の用語の問題、(4)ソーシャルワーク実践教育、(6)科学的方法の確立を目指した支援科学としてのエコシステム構想などのテーマについては、考察してきたところであるが、(5)のケアマネジメントについては、本来ソーシャルワークの固有な役割が、介護サービス給付のメニューづくりに都合よくつまみ食いされ安易に転用、資格制度まで備えて拡散し、専門性とは関係なく、社会福祉行政サービスの手続きとして逸脱しつつある問題は、特に深刻である。

さらに(1)の隣接専門領域とは、学際的な支援サービスの統合化の問題や専門領域の固有性をめぐって大きな課題をはらんでいる。また(2)は、近年の動向で、司法領域からもソーシャルワークが主張してきた支援サービスと競合する活動への進出が模索されている。特にこれから振興するであろうソーシャルワーカーの個

人開業 private practice に大きな影響を及ぼすことが必至である。このような転換期にあつてソーシャルワークの原点にもどり、社会的に付託された目的と役割に沿う実践活動で固有性を明確にしなければならない。ソーシャルワークを単なる社会的サービスの機能や役割あるいは単なる実践方法の総称や、かすんだ概念にしてしまつてはならない。

2. ソーシャルワークへの視野と発想

ソーシャルワークとは、その人の固有な社会生活に焦点を置き、包括・統合的な視野と発想で課題の解決や自己実現を支援するために、社会サービスを開発・提供し、利用者との参加と協働の過程を推進する支援科学である。そのための実践理論と科学的方法および支援ツールとを具備した固有の実践行動概念がソーシャルワークである。

広い社会福祉概念に対し、その方法や技術がソーシャルワークだとする定説的な理解を、逆に実践活動から利用者支援の目標遂行とともに、サービスの点検・計画・改善・策定までを含む実践行動概念としてソーシャルワークをとらえ直すべきだと考えてきた。米国での転換期の動向を反映した概念をジェネラル・ソーシャルワークとして提示してきた¹⁾。それはもちろん長年の継続研究を経てのことであるが、それらを改めて整理し、研究活動の経緯や成果の全体像²⁾をまとめているので是非ご一読願いたい。

ジェネラル・ソーシャルワークの視野と発想がもつ実践方法の基本的な概念特性を

- (1) 基点—利用者の固有な社会生活と実存性の尊厳
- (2) 目標—課題解決と自己実現への社会的支援
- (3) 視座—生活コスモスへの視野と方法
- (4) 理論—生活コスモスへのエコシステム理解
- (5) 発想—支援方法の学際的科学化
- (6) 手段—支援過程の推進を補足する支援ツ

ール

(7) 方法—支援過程への利用者参加と協働

(8) 展開—実践理論の行動概念化

とまとめることができる。

これらから社会生活と生活コスモス、実存性と自己実現、生活支援と支援科学、エコシステムと支援ツール、支援過程と参加・協働、包括・統合化とフィードバックなどがソーシャルワークの特性を担う鍵概念として指摘できる。

3. 焦点としての生活・支援・過程

さてソーシャルワークの特性を表す鍵概念にもさまざまなものがあるが、その中でも一大課題が「生活支援過程」という独特な概念である。この用語には三つの大きな意義がある。一つは人間理解への価値意識と姿勢から、その「生活」を人と環境さらに時間と空間から独特な経験や事実で構成されるその人固有の世界 cosmos として理解しようとする意図と、二つめに、その生活への「支援」という概念である。支援とは、利用者自身とその特殊な生活状況理解に立脚した方法を重視した概念である。したがって制度や政策に基づいたサービス提供という提供者側の援助概念ではない。利用者の生活コスモスで自らのもつ問題解決能力を育み自己実現へと進展する過程に、支援者として参加・協働する姿勢と態度、方法と技術が支援概念である。

三つめが、生活を焦点にした参加と協働からなる利用者と支援者とのコミュニケーションという支援関係が、科学的・専門的な方法にて計画的に推進されていく過程を重要視することである。ここにソーシャルワークのもつ固有で科学的な実践方法のもつ三大特性が存在している。

本共同研究では、支援の焦点になる「生活世界」の科学的かつ効果的な理解方法に焦点を絞り考察を深めている。生活とは身近な日常性の中で出会う具体的な事柄から構成されるもので、当人にとっては現実的な広がりや内容や流

れをもつ非常にトータルな概念である。しかし、それを科学として把握することは、容易なことではない。生活について関連諸科学がそれぞれ固有な研究を深めているが、ソーシャルワークにとって生活理解とは、利用者支援という実践目的への焦点ということができる。

かねてより生活支援を目標にしたソーシャルワーク実践を支援過程研究として展開してきたつもりであるが、そのために生活をどのように理解するかが一大課題である。過去 20 数年に及ぶ研究からさまざまな考察を重ねてきたところであるが、一つは生活を構造化して生活領域・生活関係・生活内容から把握しようとする試み³⁾や、さらに生活をシステム分析してエコシステム概念からシミュレーションで把握する試み⁴⁾などの試行研究を継続してきたところである。

生きざまとしての生活を当事者の世界で正確にとらえることは多分不可能といわねばならない。しかし、その現実に肉迫することは可能である。このようなありのままの生活の姿を利用者とソーシャルワーカーとが参加・協働して把握することからソーシャルワークの生活支援は始まる。生活理解は単なる目的ではなく、支援過程の推進方法や課題の解決から自己実現というソーシャルワークの目的そのものを評価する課題でもある。

以下の考察は、利用者固有の生活世界を利用者の立場で実感としてとらえる側面に焦点をあて、生活世界理解への主観的指標と、それらの認識過程への参加と協働についての展開をしたものである。

4. ソーシャルワーク実践教育への試行

本研究の特徴は、その生活支援過程の展開に役立つ方法を開発しようとするものである。そのために社会福祉専攻学生の臨床的訓練を演習場面で可能にする支援ツールの開発と活用から、専門的なソーシャルワーク実践教育の改革と促進を試みようとしたものである。

具体的には、

- (1) 教育支援ツール「エコスカナー」の開発 (生活の質 Ver. 1)
- (2) 支援ツールを用いた事例研究方法の検討
- (3) 生活状況理解への包括・統合的視野と方法の把握
- (4) そのために必要な情報と知識の収集と習得
- (5) 専門職意識の涵養と自己覚知への機会の提供
- (6) 適切な専門的援助技術の実践的習熟への支援

などである。

社会福祉の実践教育方法にコンピュータ科学を導入することを通じて、対人支援というソーシャルワークの実践教育を刷新することを目指したものである。

本研究の基礎理論や科学的方法としての実践過程研究は、20 年余の継続経過からなる背景をもち、その成果は種々公刊されてきている。そして実践へのコンピュータ導入は、急速に進展しているが、本研究は実践の効率性や利便性レベルの活用ではなく、ハイテク機器のもつ高度な機能を活用し、人間の能力では不可能な情報の処理と通信を通じ、人間の生活や時間、価値や現実を創造する仮想的方法をシミュレーションし、新しい可能性や価値実現に迫ろうとする方法である。

そのために方法としては、生活状況をエコシステムとして、

- (1) 情報処理シミュレーションでビジュアル化
- (2) 仮想現実から利用者の参加を促進する過程と方法
- (3) スキル・トレーニング・ツールとしての活用の可能性
- (4) 実践場面の VTR と組み合わせての活用
- (5) 社会福祉専攻学生への社会福祉援助技術トレーニング・ツール
- (6) 仮想現実空間での支援シミュレーション

訓練を可能にする教育方法の開発を目指したもので、他に類例をみない研究であると考えている。

本研究は、利用者の生活理解への理論と実践の展開であるエコシステム構想を基盤にして、ソーシャルワークにおける生活コスモス理解への方法の開発と、そのシミュレーション学習方法の開発を目的としている。具体的には、以下の課題への取り組み

- (1) ソーシャルワーク実践教育へのコンピュータ導入について関心の喚起
- (2) 支援ツール開発を通じた活用方法についての評価
- (3) 支援ツールを通じた理論と実践の統合化についての評価
- (4) 支援ツールの活用効果についての評価を通じた効果の考察とともに、それらのシミュレーション学習から
- (5) 生活コスモス概念の理解と明確化
- (6) 生活コスモス理解への方法体験
- (7) 利用者理解としての価値・知識の臨床学習
- (8) 支援ツールを活用したシミュレーション学習方法の展開

などについての波及効果の考察を目指したものである。

(太田義弘)

Ⅲ 社会福祉援助技術教育への構想と方法

1. 生活コスモスとエコシステム構想

社会福祉援助技術教育において利用者生活の全体性と固有性をどのように理解するかということは一大課題である。利用者の生活コスモスを把握する視点は、ソーシャルワークのもつ専門性ととともに、近年、対人支援の分野で研究や実践が行われるようになった生活の質 QOL の観点からも重要な課題である。

ソーシャルワークは、利用者の生活課題の解決と自己実現を目的としており、それは利用者の主訴や表面的なことがらだけでなく、利用

者自身や家族から環境までを含んだ状況から構成されており、生活をめぐる領域・関係・内容などからなる複雑な様相で存在している。利用者の生活を表面や部分的に理解していたのでは、問題の解決は見えてこないし、また適切な支援を行うこともできない。

利用者の生活をコスモスとして、広い視野でまた利用者自身の実感に近い状況でとらえるトータルな視点が必要となる。利用者の生活を構成する要素やその結びつきは利用者固有のものであり、その固有性を尊重する価値や視点をもたない生活理解では、ソーシャルワークとして有効な支援を展開することができない。

利用者の生活コスモスに対する全体性と固有性への視点は、生活の質の向上という観点からも重要な課題である。「生活の質」概念の特徴として、人間の生活を部分的に理解することから、生活をコスモスとして統合的全体性 holism をもつ固有なものとして理解することが必要である。例えば、医療においては、患者を身体的・生理的側面からとらえるだけではなく患者の生活や人生を視野に入れた治療をすることから「生活の質」の向上を図る試みも盛んである。生活全体に視野を広げることは、対象の固有性・主体性の尊重にも繋がっている。医療の領域で患者の生活全体に目を向けることで、患者の望む生活への理解を念頭に治療方針が決定されるようになってきている。そして、これまで医師の独断であった治療に、患者が参加することから選択・決定の道が開かれるようになってきている。このような観点から「生活の質」という概念が、実践や研究に導入されるようになり、人間の生活コスモスに目が向けられ、そこに生きる人間の固有性・主体性が注目され、尊重されるようになってきている。

利用者の生活への全体的視点と利用者生活の固有性の尊重は、ソーシャルワークが本来もっている専門性であるが、それを実践に反映させる科学的方法の研究は重要な課題である。多くの対人関係専門領域においても、生活の質とい

エコスキャナーは、利用者の生活システムを細かな情報因子に分解した情報として収集し、それらを支援に必要な情報へと処理・加工する。そして、その情報を蓄積することによって生活の変容過程を把握しようとするものである。エコスキャナーが処理するデータは、固有な生活情報として集積され、支援過程で活用されことになるが、情報収集のための質問は、生活を構造化して分類された因子から構成されている。図 3 は、情報を入力する画面を呼び出す「情報入力画面」である。32 の内容構成子に対して、それぞれ 4 つの質問があり、それらに回答することによって利用者の生活情報が収集される。「情報入力画面」から指定した項目を選択して呼び出した画面が「質問画面」である (図 4)。ここから質問に対する回答を入力し、収集された情報をシミュレーションし、ビジュアル化を行うことになる⁶⁾。このビジュアル化された情報をもとに、固有な生活コスモスを利用者とともに理解し、支援方法を検討していくことになる (図 5)。

そこでソーシャルワークの支援展開におけるエコスキャナーの役割は、次のようなことにまとめられる⁷⁾。

- ①利用者の複雑な生活状況に関する多くの情報を整理・分析して保存
- ②収集した情報をシミュレーションによりビジュアル化
- ③ビジュアル化することで生活の変容を時系列で表示
- ④ビジュアル化によって生活理解と、問題解決や課題達成への参加を促進
- ⑤利用者とソーシャルワーカーが参加と協働するコミュニケーションを促進

などであるが、このようにエコスキャナーを支援ツールとして活用することで、利用者生活の理解と支援への参加と協働を目指したエコシステム構想が展開できる。

エコスキャナーを社会福祉援助技術教育に活用することが本共同研究の目的であるが、それは複雑で固有な生活コスモスをエコシステムとして理解すること、つまりリアルな生活の実感をビジュアル化して体験することを可能にする方法である。またビジュアル化された情報を利用者と話し合いながら、アセスメントや支援計画の立案など支援過程を進めることへの確かな情報をえることが可能になる。エコスキャナーを支援スキル訓練へのツールとして活用するこ

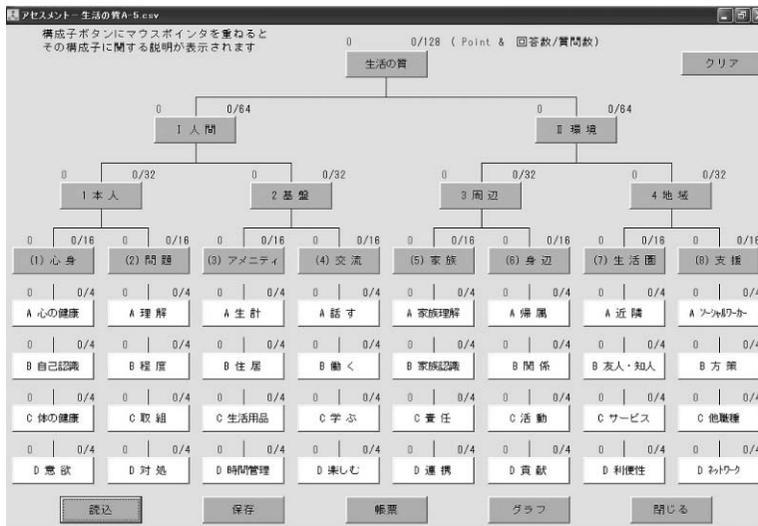


図 3 情報入力画面

図 4 質問画面

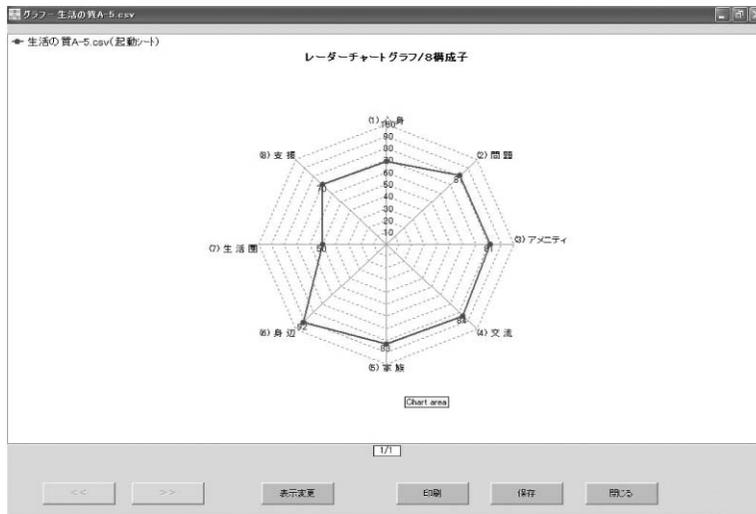


図 5 生活情報のビジュアル化

とで、利用者の固有な生活コスモスを理解し、支援への参加と協働からなる実践展開の方法を、有効で科学的かつ実存的に推進することが可能になると考えている。

3. 支援ツールの内容と作成経緯

本研究では、利用者の生活の全体性と固有性を尊重した生活コスモスの理解に向け、利用者

の生活の質を把握するためのエコスカナーの開発に取り組んだ。利用者の生活情報を収集するための 128 因子は、図 6 のように利用者の生活を理論的に構造化して作られている。まず、生活は人間と環境から構成されるものと考え、生活をマイクロレベルからメゾレベルに広がるように、人間と環境を本人・基盤と周辺・地域の 4 つの分野構成子に分類している。次に、それ

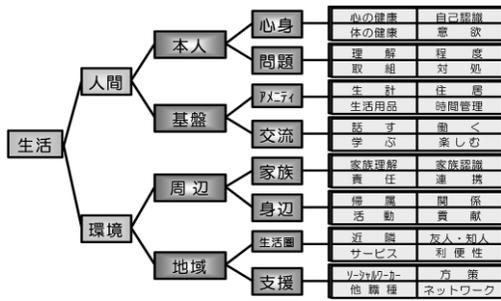


図 6 生活の構造化

らを 2 分割して 8 構成からなる属性構成子に分割し、「本人」を「心身」と「問題」に分割し、利用者自身の心身の状況と問題状況を把握する項目としている。「基盤」を「アメニティ」と「交流」に分割し、利用者自身の生活の基盤となる生計や住居の様子や対人交流についての情報収集をすることになる。

「周辺」では、「家族」と「身辺」という属性構成子から利用者を取り巻く環境としての家族との関係や、職場や学校など利用者が帰属する組織や場所での活動状況や関係を把握する。「地域」では、環境についてメゾレベルでの分野構成子を取り上げ、「生活圏」と「支援」に分割し、ソーシャルワークにおける支援状況の把握とともに、他の制度やサービスとの関わりや資源としての近隣や知人・友人との関わりなどを把握することになる。

これらの 8 属性構成子を、さらに各々 4 分割して 32 の内容構成子へと細分割している。この 32 に分割された項目は、内容構成子として、さらに 4 項目の因子に分割された質問で構成されている。つまり①現状認識、②方策、③方法、④評価に関する質問が設けられており、合計 128 の因子からなる質問で構成され、それらをシミュレーションして利用者の固有な生活をトータルに把握することになる。

エコスキャナーの開発にあたり、学生に対して、上記の 128 項目の質問に自らの生活をイメージして回答してもらい、自由記述で質問内容についての意見を聴取する予備調査をした。質

問について種々な意見を得ることができたが、例えば、抽象的な表現の質問があり、質問内容が生活上の具体的な事柄と結びすきにくいという意見や、このことに付随して、抽象的な表現の質問では、他の質問との違いが理解できず、質問内容が重複していると感じたという意見もあった。

質問回答については、選択肢を 4 段階で設定していたが、イエスかノーかという 2 者択一ではなく段階的に選べることの利点に対する意見と同時に、相違が判断しにくく迷ってしまうとの意見もあった。今後に向けて学生や利用者が自らの生活をイメージしやすい回答へと、具体的に平易な表現に改善する余地も残されている。これらの学生からの意見をふまえ、エコスキャナー開発の課題は山積している。

(長澤真由子)

IV 社会福祉実践教育の実際と評価

1. 支援ツールのねらいと実践教育への活用

1987 年に制定された社会福祉士法及び介護福祉士法は、2000 年の改正によって大きく社会福祉実践教育に改革と拡充を求められることになった。これによって、学生や社会福祉の従事者はソーシャルワーク理論と実践をつなぐ学習の重要性を再認識させられることとなった。しかし一方で、これらの状況に対応できる担当教育者の養成や配備などの性急なニーズへの対応には限界があり、ソーシャルワーク教育の専門的基盤を欠いた小手先の安易な技術学習が横行している。

ソーシャルワークとは、生活問題を人間と環境よりなる空間と時間の拡がりや流れから理解し、利用者固有の生活コスモスを理解することから始まる。そしてこの生活コスモス理解には、複雑な生活を構成するあらゆる要素の情報をエコシステム概念に基づき、包括・統合的に認識することが必要となる。またそのためには、多くの情報を収集・整理するコンピュータを介した支援ツールが不可欠であり、それによ

ってソーシャルワーク教育の専門的基盤となる視点、目的、発想、焦点、特性、展開などが学習可能となるのである。

コンピュータ支援ツールについては、近年、社会福祉の領域でも多様な視点から研究が行われ始めた。そのなかにあつて本研究の前提となるコンピュータ支援ツールは、十数年かけて改良を重ねようやく2005年に『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング CD-ROM付き』（太田義弘他編）の出版で多くの人の目に触れることとなった。そこで本研究では、さらに次の段階として支援ツール（エコスキャナー）を活用したシミュレーション演習を積み重ねることと、それを改良して生活の質を取り入れた生活コスモス理解の支援ツール開発を目的とした。特に本節では、社会福祉系の大学、大学院で継続的にシミュレーション演習を実施し、エコスキャナー活用調査分析を行った結果からその効果や課題を明確にした。具体的には教育目的（「自分の生活」と「事例利用者の生活」）、教育対象数（一人とグループ）、教育展開過程（単発と継続）を意識しながら、①支援ツールについての関心、②支援ツールの活用方法、③支援ツールの考え方、④支援ツールの活用効果、について3大学・大学院からのアンケート調査の考察結果を報告するものである。

2. 支援ツール（エコスキャナー）活用調査の概要

まず、シミュレーション演習の実施評価については、受講者へのヒヤリングと演習の実施結果の分析からまとめている。教育目的からみると、「自分の生活」シミュレーションが比較的参加者に好評で、実践教育の導入になることが理解できた。また事例からの「利用者の生活」理解は、生活状況と変容の理解、アセスメント方法、問題規定と支援方法の検討という目的の明確化を、何度も演習を行いその学習を積み上げることで効果が得られていた。次に一人かグループかという教育対象数やどのような流れで

演習を行ったかという教育展開過程とその位置づけでは、支援ツールの使い方、事前の講義や実施回数と実施時間（1日か2、3日か）との関係で変化がみられた。それは、教育プログラムが教育者側によるデモンストレーション、ソーシャルワーカーの技術獲得と専門性の向上のための個別学習、共通認識過程と支援の協働トレーニングとしてのグループ学習、と多様であった。

そこで支援ツール活用の状況は、本研究期間中に行った多様な教育プログラムでエコスキャナー演習を行った①関西福祉科学大学大学院生17名、②京都府立大学大学3回生28名、③広島国際大学2回生65名、の110名に以下のアンケートを実施した。すでに述べてきたようにこのエコスキャナーを用いたシミュレーション演習は、担当教員の講義をふまえたうえで行われているが、エコスキャナーに活用する事例、実施時間や回数、演習方法は各担当教員によって違いがある。また各大学での教育年数や調査で得られた数にも違いがあるので、今回は各質問に対して円グラフ（全体の割合）と棒グラフ（各大学・大学院の回答に対する割合）を示して考察した。なお、記入漏れや番号以外の文字の記入については、未回答としてまとめ、自由回答については、特徴的な点だけを「おわりに」であげてみた。

エコスキャナー（支援ツール）活用調査

次の質問にお答えください。該当する回答の数字を に記入して下さい。

1 支援ツールについての関心

(1) コンピュータを利用者の支援に活用することについて関心がありますか。

- 1 とても関心がある。
- 2 ある程度関心がある。
- 3 少し関心がある。
- 4 あまり関心がない。
- 5 まったく関心がない。

(2) 支援ツールを活用する目的や方法はよく理解で

きましたか。

- 1 よく理解できた。
- 2 ある程度理解できた。
- 3 少し理解できた。
- 4 あまり理解できなかった。
- 5 まったく理解できなかった。

(3) 複雑な生活状況を理解するために、128 もの質問は必要だと思いますか。

- 1 当然必要だと思う。
- 2 もう少し簡単にすることが必要だと思う。
- 3 もっと簡単にすることが必要だと思う。
- 4 多すぎると思う。
- 5 多すぎて関心が薄れると思う。

(4) 質問の内容はよく理解できましたか。

- 1 よく理解できた。
- 2 ある程度理解できた。
- 3 少し理解できた。
- 4 あまり理解できなかった。
- 5 まったく理解できなかった。

(5) エコシステムは、生活という複雑なコスモス(固有な世界)を把握する方法やアイデアであることが理解できましたか。

- 1 よく理解できた。
- 2 ある程度理解できた。
- 3 少し理解できた。
- 4 あまり理解できなかった。
- 5 まったく理解できなかった。

2 支援ツールの活用方法

(1) 支援ツールを操作してみて興味をもてましたか。

- 1 とても興味をもった。
- 2 かなり興味をもった。
- 3 操作に馴れると興味をもつと思う。
- 4 あまり興味が無い。
- 5 まったく興味が無い。

(2) 支援ツールを活用することで、勘と経験だけでなく支援活動に新しい展開が期待できると思いますか。

- 1 大いに期待できる。
- 2 かなり期待できる。
- 3 いくらか期待できる。
- 4 あまり期待できない。
- 5 期待できない。

(3) さまざまなデータのもつ意味や内容を利用者とともに考え、利用者の選択・決断・行動を有効に支援することに役立つと思いますか。

- 1 大いに役立つと思う。
- 2 かなり役立つと思う。

- 3 いくらか役立つと思う。
- 4 役立つかどうかわからない。
- 5 役立つとは思わない。

(4) 支援活動を専門的・科学的に推進するため支援過程を深める必要がありますが、そのために支援ツールは役立つと思いますか。

- 1 大いに役立つと思う。
- 2 かなり役立つと思う。
- 3 いくらか役立つと思う。
- 4 役立つかどうかわからない。
- 5 役立つとは思わない。

(5) 支援ツールを活用することによって、ソーシャルワークの重要性や固有性(視野・発想と方法・活動)が理解できましたか。

- 1 よく理解できた。
- 2 ある程度理解できた。
- 3 少し理解できた。
- 4 あまり理解できなかった。
- 5 ほとんど理解できなかった。

3 支援ツールの考え方

(1) 支援ツールの考え方は、ソーシャルワーカーから見た利用者の生活世界(コスモス)を把握するための手段であることが理解できましたか。

- 1 よく理解できた。
- 2 ある程度理解できた。
- 3 少し理解できた。
- 4 あまり理解できなかった。
- 5 まったく理解できなかった。

(2) 支援ツールは、利用者の内面や身近な生活状況からネットワークや社会資源などの環境までを視野に入れた発想であることが理解できましたか。

- 1 よく理解できた。
- 2 ある程度理解できた。
- 3 少し理解できた。
- 4 あまり理解できなかった。
- 5 まったく理解できなかった。

(3) 支援ツールは、生活状況の変化や時間的な流れを把握する方法であることが理解できましたか。

- 1 よく理解できた。
- 2 ある程度理解できた。
- 3 少し理解できた。
- 4 あまり理解できなかった。
- 5 まったく理解できなかった。

(4) 支援ツールは、生活の質(生活の内容を実感としてとらえる考え方)を課題にしていることが理解できましたか。

- 1 よく理解できた。
- 2 ある程度理解できた。
- 3 少し理解できた。
- 4 あまり理解できなかった。
- 5 ほとんど理解できなかった。

(5) 支援ツールは、利用者の生活を専門的かつ科学的な視野で把握する方法であることが理解できましたか。

- 1 よく理解できた。
- 2 ある程度理解できた。
- 3 少し理解できた。
- 4 あまり理解できなかった。
- 5 ほとんど理解できなかった。

4 支援ツールの活用効果

(1) 支援ツールは、利用者の固有な生活状況を効果的に把握するツール（道具）であることが理解できましたか。

- 1 よく理解できた。
- 2 ある程度理解できた。
- 3 少し理解できた。
- 4 あまり理解できなかった。
- 5 まったく理解できなかった。

(2) 支援ツールでビジュアル化（視覚化）することによって、利用者の複雑な生活状況理解を改善することができましたか。

- 1 とても改善できた。
- 2 かなり改善できた。
- 3 いくらか改善できた。
- 4 あまり改善できなかった。
- 5 何も改善できなかった。

(3) 支援ツールを活用することによって利用者や関係者とのコミュニケーションが、促進できると感じましたか。

- 1 大いに促進できると感じた。
- 2 かなり促進できると感じた。
- 3 いくらか促進できると感じた。
- 4 あまり促進できるとは感じない。
- 5 何も促進できるとは感じない。

(4) 支援ツールの活用によって、有効な参加と協働からなる利用者支援を可能に感じましたか。

- 1 大いに可能に感じました。
- 2 かなり可能に感じました。
- 3 いくらか可能に感じました。
- 4 あまり可能に感じない。
- 5 ほとんど可能に感じない。

(5) 支援ツールを活用することで、ソーシャルワー

ク実践が専門性や科学性にチャレンジしていると実感できましたか。

- 1 とても実感できた。
- 2 かなり実感できた。
- 3 いくらか実感できた。
- 4 あまり実感できなかった。
- 5 何も実感できなかった。

3. 調査による支援ツール活用の評価

110名によるエコスキャナー（支援ツール）活用調査の結果は、以下のとおりである。初めに今回は3大学間ですべての質問項目で χ^2 検定を行った結果、有意差がみられた。なおここでは4つの中項目の検定結果を紹介すると、次のように支援ツールの活用方法と活用効果において特に高い有意差がみられた。

支援ツールへの関心 $\chi^2=15.64$ $df=6$ $p<.05$

支援ツールの活用方法 $\chi^2=65.245$ $df=6$ $p<.01$

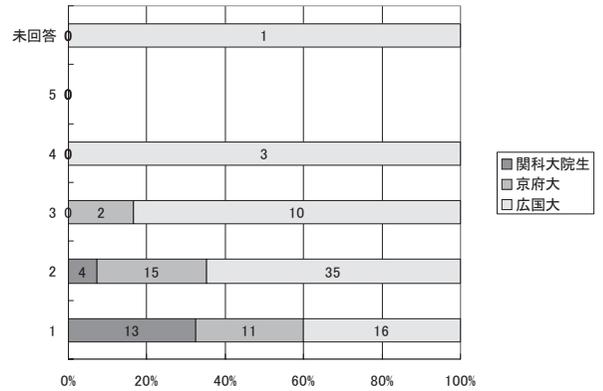
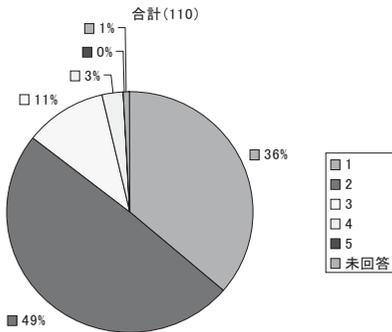
支援ツールの考え方 $\chi^2=15.058$ $df=8$ $.05<p<.10$

支援ツールの活用効果 $\chi^2=56.147$ $df=6$ $p<.01$

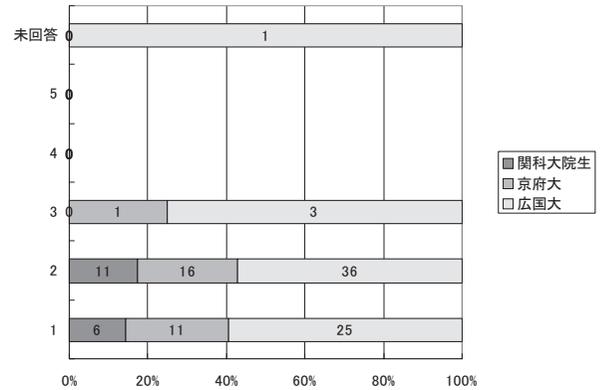
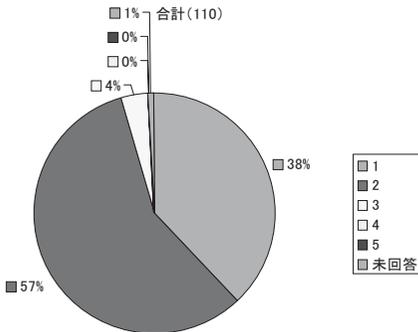
この円グラフ（全体の割合）と棒グラフ（各大学・大学院の回答に対する割合⁸⁾は、すでに述べてきたとおり、質問項目に対応して作成したものである。

まず、1支援ツールについての関心の項目について、「(1) コンピュータを利用者の支援に活用することについて関心がありますか。」では「1 とても関心がある。」と「2 ある程度関心がある。」の回答が85%を占めていた。また「(2) 支援ツールを活用する目的や方法はよく理解できましたか。」では、「1 よく理解できた。」と「2 ある程度理解できた。」で95%の回答が得られた。しかし「(3) 複雑な生活状況を理解するために、128もの質問は必要だと思いませんか。」の項目では、「1 当然必要だと思う。」が30%にとどまり、「2 もう少し簡単にすることが必要だと思う。」と「3 もっと簡単にすることが必要だと思う。」の回答では大学院生の意見が

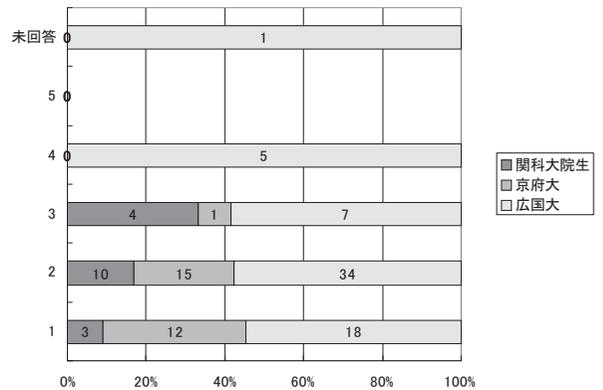
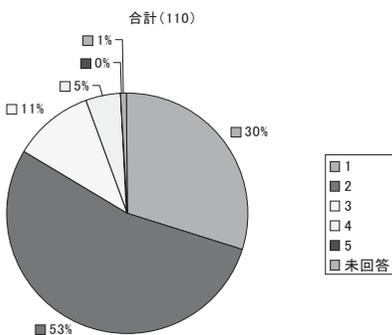
1-(1) コンピュータを利用者の支援に活用することについて関心がありますか。



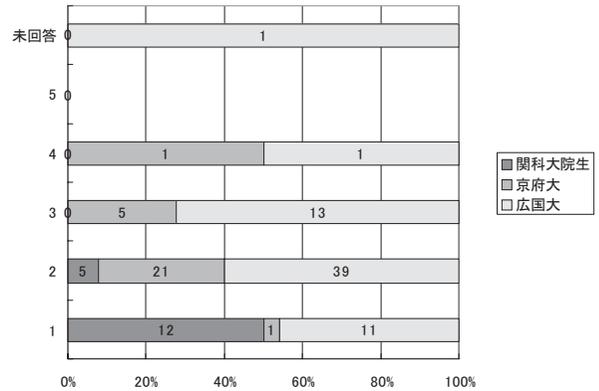
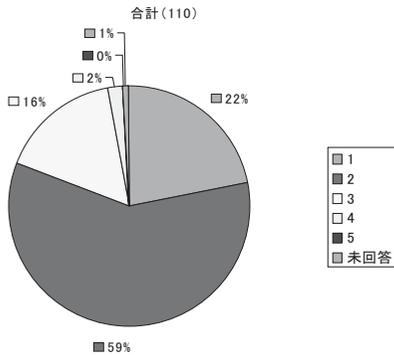
1-(2) 支援ツールを活用する目的や方法はよく理解できましたか。



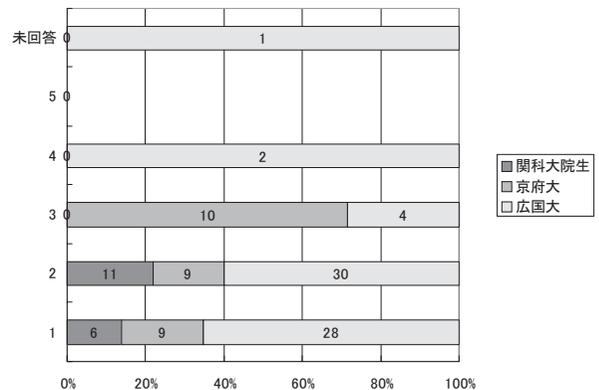
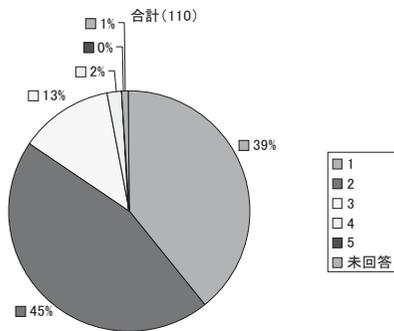
1-(3) 複雑な生活状況を理解するために、128 もの質問は必要だと思いますか。



1-(4) 質問の内容はよく理解できましたか。



1-(5) エコシステムは、生活という複雑なコスモス（固有な世界）を把握する方法やアイデアであることが理解できましたか。



多くみられていたのが特徴的で、実践経験者がいる大学院生の現実的な意見の反映がみられたように思われる。

次の「(4) 質問の内容はよく理解できましたか。」と「(5) エコシステムは、生活という複雑なコスモス（固有な世界）を把握する方法やアイデアであることが理解できましたか。」についても「1 よく理解できた。」と「2 ある程度理解できた。」をあわせると80%以上を超える回答で総じて支援ツールへの関心は高いと理解できた。

次の2支援ツールの活用方法の項目では、

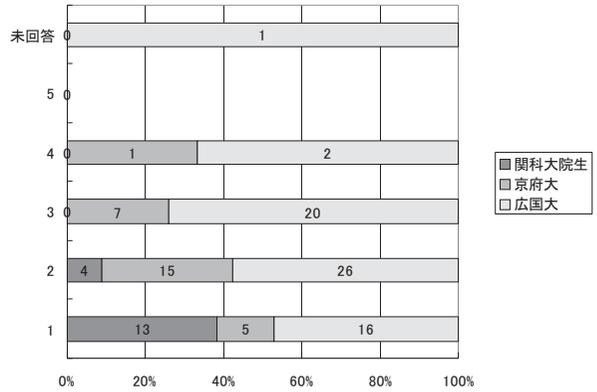
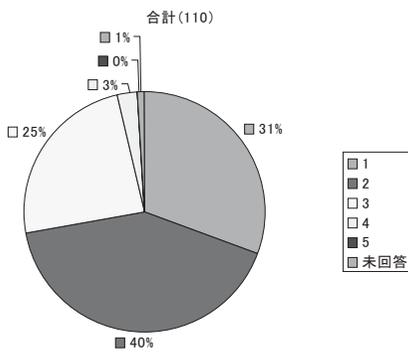
「(1) 支援ツールを操作してみて興味をもてましたか。」という質問に「1 とても興味をもった。」と「2 かなり興味をもった。」をあわせて71%の結果が出た。しかし25%の受講生は、「3 操作に馴れると興味をもつと思う。」という意見であった。これについては、エコスキャナー活用経験が増すとさらに興味を得られることの証明になるように思われる。次に「(2) 支援ツールを活用することで、勤と経験だけでなく支援活動に新しい展開が期待できると思いますか。」という質問では、未回答の2%を除く98%が期待できるという意見であった。このことは、エコスキャナーによって勤と

経験で行ってきた実践を払拭できると考えている受講生がほとんどであるということがわかった。

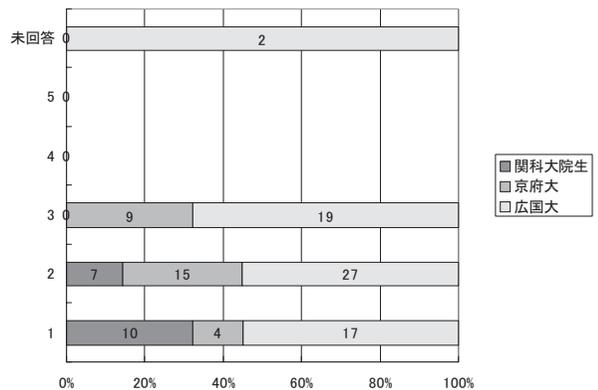
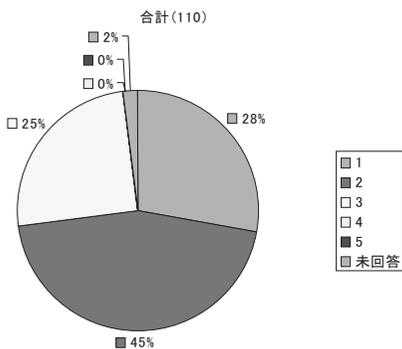
また「(3) さまざまなデータのもつ意味や内容を利用者とともに考え、利用者の選択・決断・行動を有効に支援することに役立つと思いますか。」と「(4) 支援活動を専門的・科学的に推進するため支援過程を深める必要がありますが、そのために支援ツールは役立つと思いますか。」は、「1 大いに役立つと思う。」「2 か

なり役立つと思う。」で 70% 以上を超えており、エコスキャナーの活用の実践可能性を示唆するものとなった。そして「(5) 支援ツールを活用することによって、ソーシャルワークの重要性や固有性(視野・発想と方法・活動)が理解できましたか。」についてが 2 支援ツールの活用方法の項目で「1 よく理解できた。」と「2 ある程度理解できた。」で 81% と一番高く、各教育者の講義と演習が連携している成果をここに見ることができると思われる。

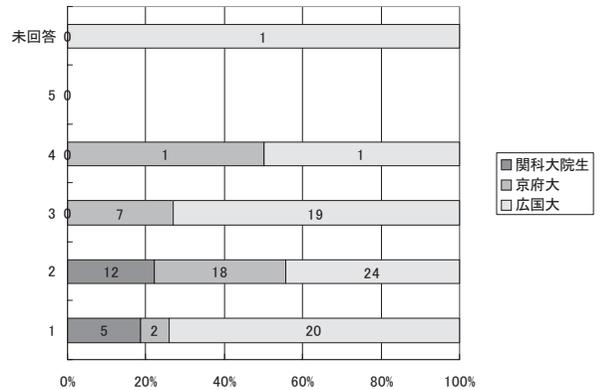
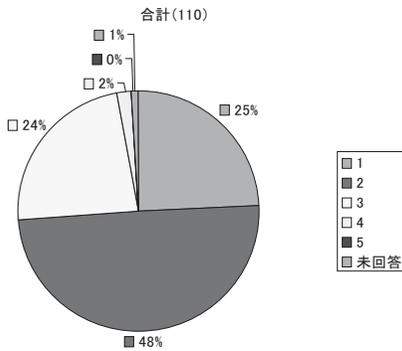
2-(1) 支援ツールを操作してみて興味をもてましたか。



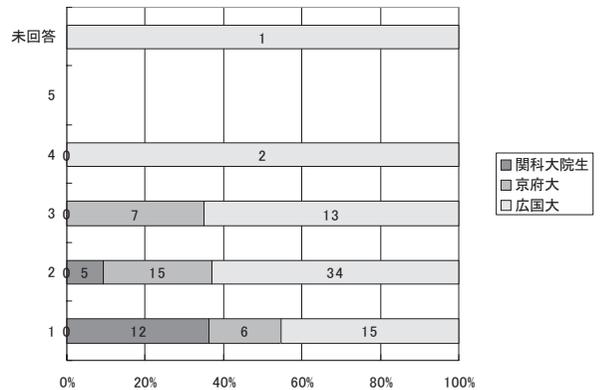
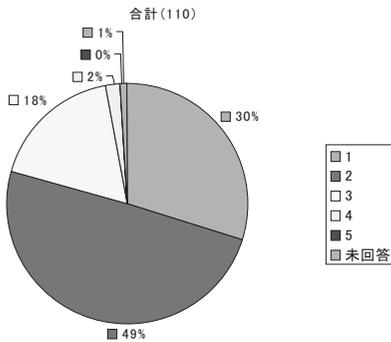
2-(2) 支援ツールを活用することで、勘と経験だけでなく支援活動に新しい展開が期待できると思いますか。



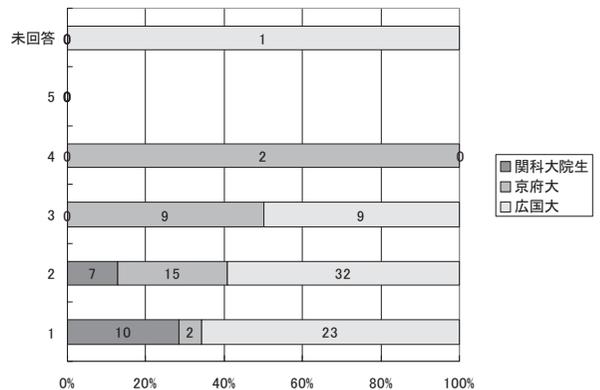
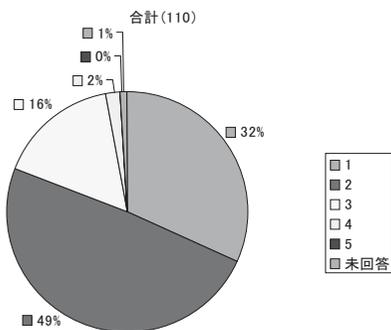
2-(3) さまざまなデータのもつ意味や内容を利用者とともに考え、利用者の選択・決断・行動を有効に支援することに役立つと思いますか。



2-(4) 支援活動を専門的・科学的に推進するため支援過程を深める必要がありますが、そのために支援ツールは役立つと思いますか。



2-(5) 支援ツールを活用することによって、ソーシャルワークの重要性や固有性（視野・発想と方法・活動）が理解できましたか。

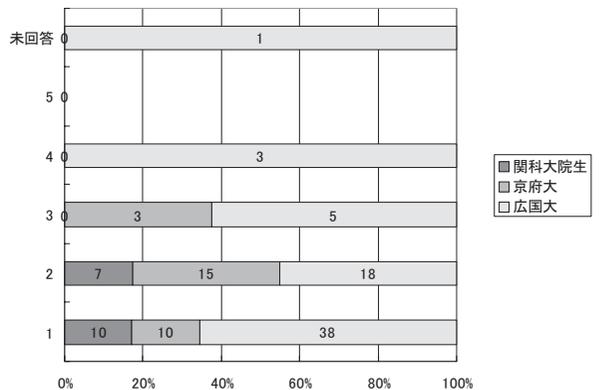
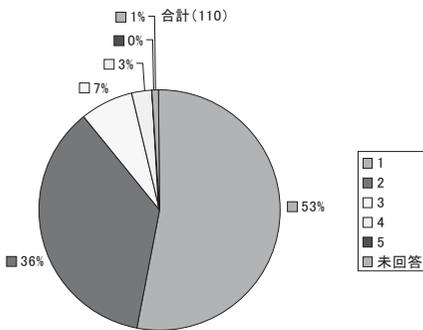


3 支援ツールの考え方では、「1) 支援ツールの考え方は、ソーシャルワーカーから見た利用者の生活世界（コスモス）を把握するための手段であることが理解できましたか。」「(2) 支援ツールは、利用者の内面や身近な生活状況からネットワークや社会資源などの環境までを視野に入れた発想であることが理解できましたか。」と「(3) 支援ツールは、生活状況の変化や時間的な流れを把握する方法であることが理解できましたか。」が総じて受講生の評価が高かった。特に3つの質問項目は、「1 よく理解できた。」の回答が50%以上を超えており、事前講義や演習プログラム内容、幅広い視野からのアセスメント体験などで、エコスキャナーがもつ特徴的な考えを理解することが可能になったと考えられる。

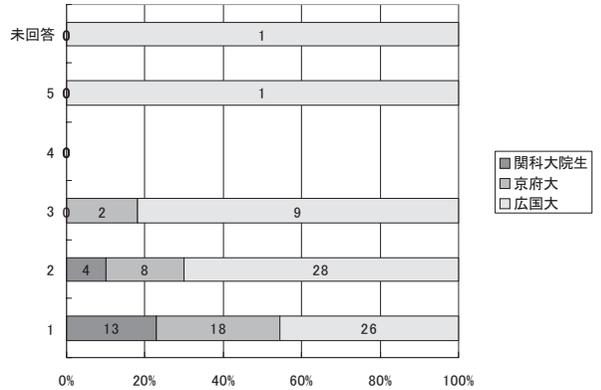
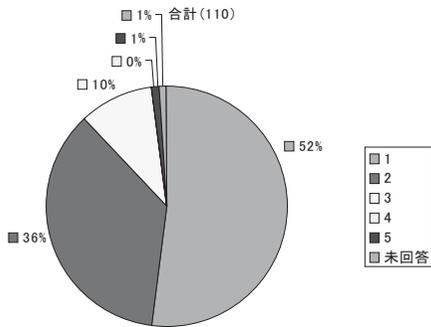
次の「(4) 支援ツールは、生活の質（生活の

内容を実感としてとらえる考え方）を課題にしていることが理解できましたか。」については、Ⅲ 社会福祉援助技術教育への構想と方法で論じられているようにエコスキャナーの質問に対する意見を聞くことをはじめ、生活の質に関する支援ツールの改良を始めたばかりである。そのためこの項目では「1 よく理解できた。」が34%と低く、現在の教育支援ツールのエコスキャナーがこのことを意識することが比較的困難であったといえよう。また「(5) 支援ツールは、利用者の生活を専門的かつ科学的な視野で把握する方法であることが理解できましたか。」は、受講生が専門的や科学的の意味をどこまで理解できているのかがわかりにくい状況がみられた。特に、エコスキャナーと結びつけて理解することが難しく、アンケートでは、「1 よく理解できた。」が33%にとどまった。

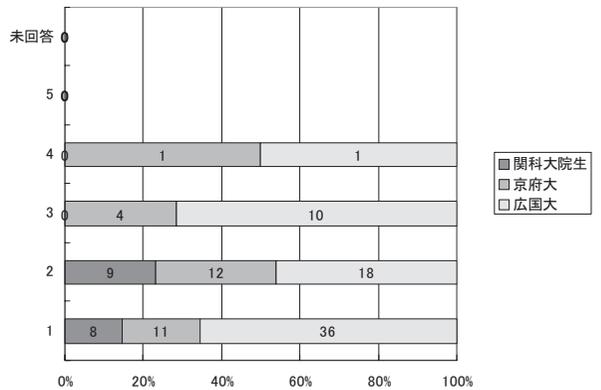
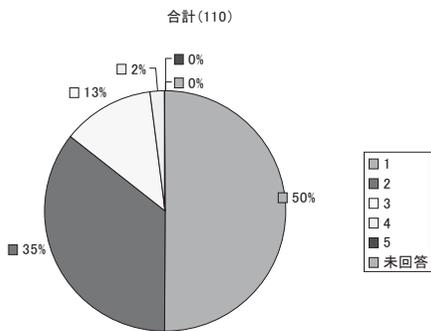
3- (1) 支援ツールの考え方は、ソーシャルワーカーから見た利用者の生活世界（コスモス）を把握するための手段であることが理解できましたか。



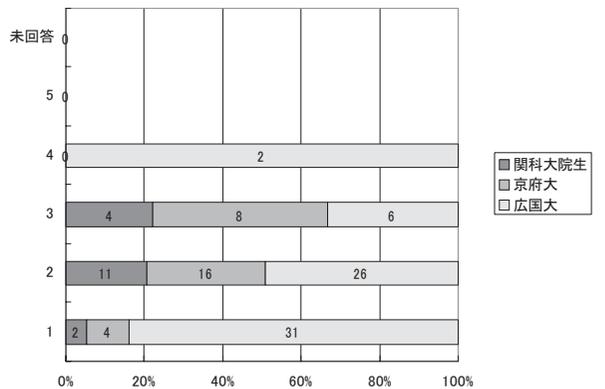
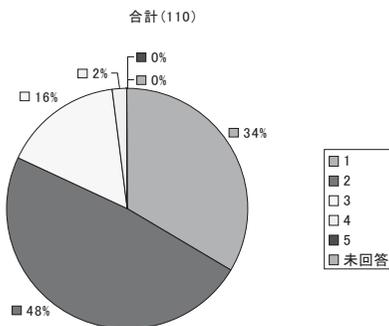
3- (2) 支援ツールは、利用者の内面や身近な生活状況からネットワークや社会資源などの環境ま
 を視野に入れた発想であることが理解できましたか。



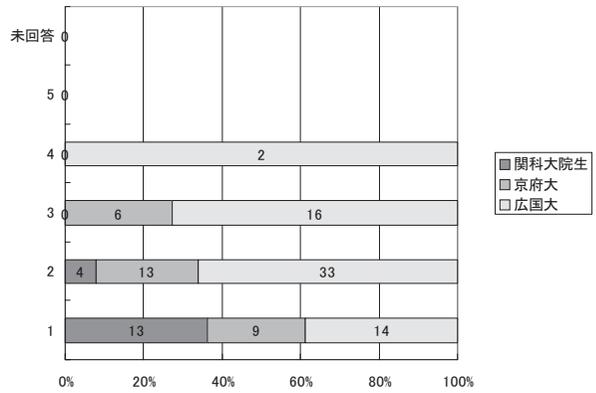
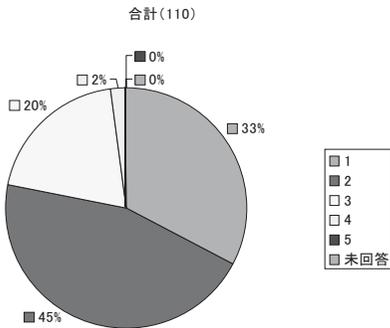
3- (3) 支援ツールは、生活状況の変化や時間的な流れを把握する方法であることが理解できま
 したか。



3- (4) 支援ツールは、生活の質（生活の内容を実感としてとらえる考え方）を課題にしているこ
 とが理解できましたか。



3-(5) 支援ツールは、利用者の生活を専門的かつ科学的な視野で把握する方法であることが理解できましたか。

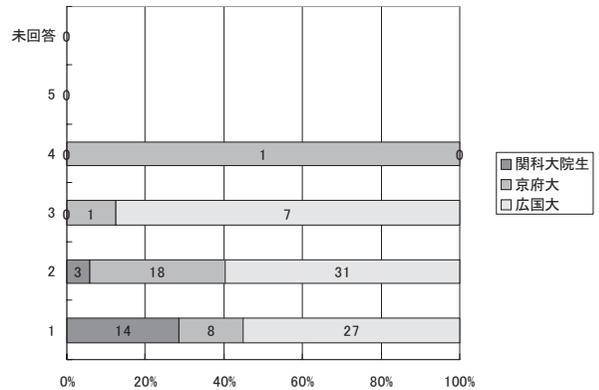
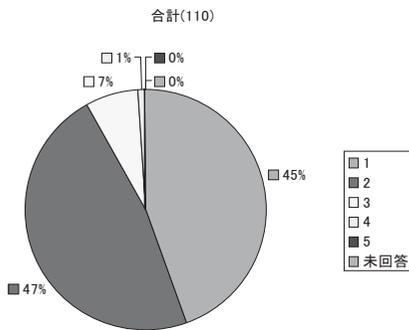


そして 4 支援ツールの活用効果について、「(1) 支援ツールは、利用者の固有な生活状況を効果的に把握するツール (道具) であることが理解できましたか。」では、「1 よく理解できた。」の回答が 45% と約半数の受講生が評価している。しかし「(2) 支援ツールでビジュアル化 (視覚化) することによって、利用者の複雑な生活状況理解を改善することができましたか。」「(3) 支援ツールを活用することによって利用者や関係者とのコミュニケーションが、促進できると感じましたか。」と「(4) 支援ツールの活用によって、有効な参加と協働からなる利用者支援を可能にすると感じましたか。」については、「1 よく理解できた。」と「2 ある程度理解できた。」で 70% を下回っていた。このことは、現状の事例を用いたシミュレーション

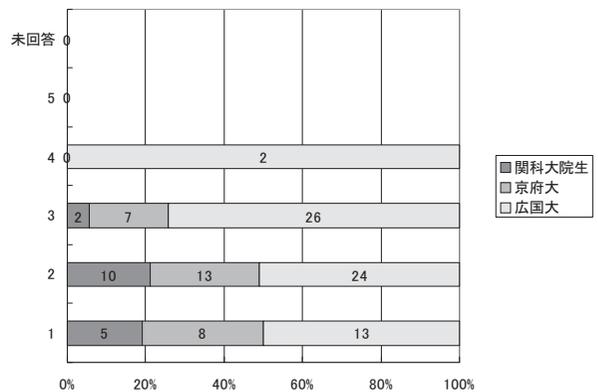
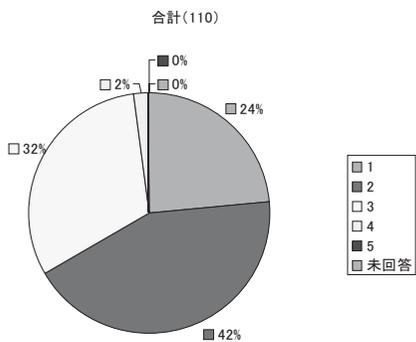
演習の限界と課題を明確にしたと思われる。受講生は、エコスキャナーを使うことで、それが実践で役立つツールであると理解しているものの、目の前に利用者がいて実際にそれを活用する場面がないゆえ、視覚化やコミュニケーション体験が可能になるという質問 (1) と (2)、(3)、(4) の質問意図が繋がっていない。その意味では演習プログラムの工夫と早急な実践ツールの開発が望まれるところである。

また「(5) 支援ツールを活用することで、ソーシャルワーク実践が専門性や科学性にチャレンジしていると実感できましたか。」は、3 支援ツールの考え方の質問 (5) と同様でエコスキャナーから専門性や科学性を結びつけるための課題があるように思われた。

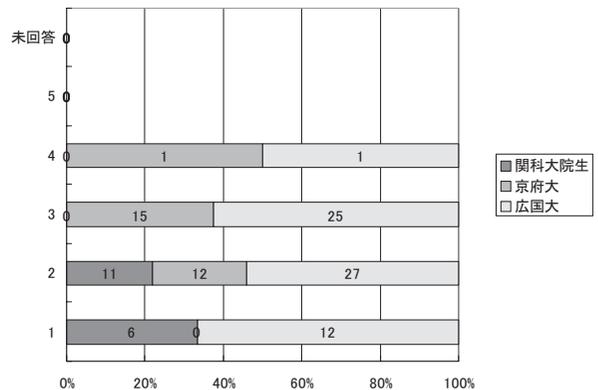
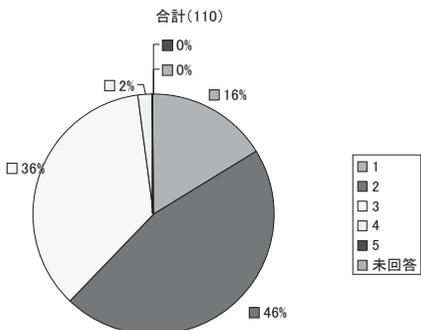
4-(1) 支援ツールは、利用者の固有な生活状況を効果的に把握するツール（道具）であることが理解できましたか。



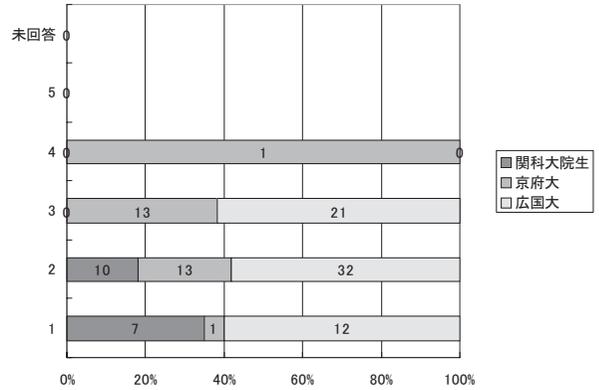
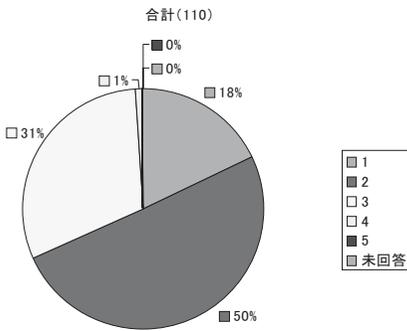
4-(2) 支援ツールでビジュアル化（視覚化）することによって、利用者の複雑な生活状況理解を改善することができましたか。



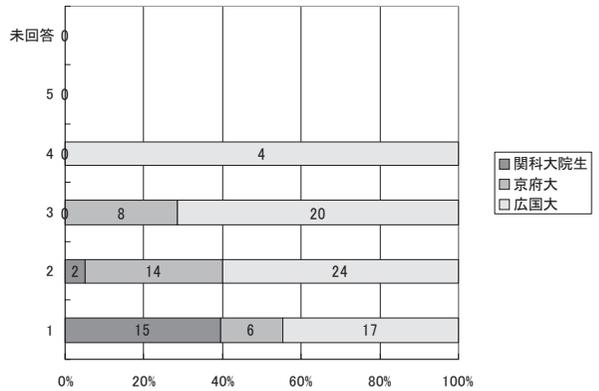
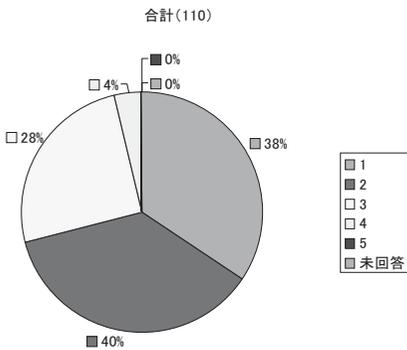
4-(3) 支援ツールを活用することによって利用者や関係者とのコミュニケーションが、促進できると感じましたか。



4-(4) 支援ツールの活用によって、有効な参加と協働からなる利用者支援を可能にすると感じましたか。



4-(5) 支援ツールを活用することで、ソーシャルワーク実践が専門性や科学性にチャレンジしていると実感できましたか。



V おわりに

これまで詳細に調査考察を試みてきたが、少し自由記述についても触れてみると各大学・大学院で次のような内容⁹⁾がみられた。

● 広島国際大学

6割近くの学生が、「グラフ化することで、生活状況やその変容が理解しやすい」という感想をもっていることがわかった。また、「自分が気づかなかった点や、他者との違いに気づくことができた」や「便利なツールだと感じた」という感想も多かった。一方

で、「質問内容や表現の仕方が難しかった」や「128項目の質問は多い」、「質問に回答するのが大変だった」という感想も寄せられた。全体として、グラフ化に対する関心は高いが、生活理解におけるエコスキャナー活用の意味についての理解はそれほど高くはないという印象である。

● 京都府立大学

6割強の学生が、「グラフ化することで、生活状況やその変容が理解しやすい」という感想をもっていた。また、「入力する人によってグラフに違いがでる」ことに注目する学

生も多いことがわかった。その一方で、「質問がわかりにくい、難しい、多い」という意見も多かった。全体として、エコスカナーに興味や関心を抱く者が多く、エコスカナー活用の意味への関心が高いという印象を受けた。

● 関西福祉科学大学院生

自由記述では、「現場で使用してみるとその意義がより実感できると思う」という感想が寄せられており、実践への関心の高さをうかがわせる。アンケートの回答からも、エコスカナーに対する理解度が高いことがわかる。

これらの調査結果は、5年前に行った調査¹⁰⁾と同様に受講生の評価は高い。特に5年前に比べて受講生はコンピュータを活用することに抵抗がなくなった感があり、そこからエコスカナーを繰り返し学習場面で活用することが可能ならば、スムーズな応用展開が臨めると考えられる。またエコスカナーがソーシャルワークに重要なツールであるという認識も強い。しかしそこから利用者支援へ向けた実用化やソーシャルワークの専門性・科学性への理解に結びつくかという点はまだ不十分で、今後の課題といわざるをえない。

このような意味において、エコスカナーで学習した生活コスモスのビジュアル化と変容過程は、従来生活認識で用いられているエコマップやジェノグラムを超える新しい学習支援となるだろう。特にそこでは、①利用者の生活コスモスを触覚的に体験し、視覚的に提供できること、②グラフによるビジュアル化からイメージづくりや振り返りが可能となること、③社会福祉援助技術総論や社会福祉実習・演習を始め、分野論においても活用可能であること、④教育者の創意工夫によって、多様な活用方法が考えられること、が期待される。そしてそれらを深化させていくためには、調査結果をみてもわかるようにさらなる検討課題があることが理解できた。しかしかつて社会福祉の領域でコンピュ

ータが敬遠されてきた時代に比べると、この実践教育は抵抗なく普及していくと確信している。そして今後さらに日常的に活用していくためには、支援ツールそのものの開発（操作方法、生活の質バージョンの検討、アニメーション化）や教育プログラムの再検討（当事者参加やDVD・ロールプレイとの組み合わせ）が課題となる。また本研究では、ようやく生活の質に向けたエコスカナーの質問項目に関する妥当性の検証が始まった。今後はそのこともふまえた生活コスモス理解をより深めていく学習支援方法の開発が必要不可欠と考えられる。

(中村佐織)

注

- 1) 太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館 1999年 参照
- 2) これらの諸課題などについては、「研究業績一覧」龍谷大学 社会学部紀要 第22号 2003年 参照
- 3) 太田義弘『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房 1992年 55頁
- 4) 前掲編著『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館 1999年 32頁以下
- 5) 前掲紀要 6頁
- 6) エコスカナーによる具体的なシミュレーション方法、操作方法については以下の文献を参照されたい。
①太田義弘 野澤正子 中村佐織「ソーシャルワーカーへの支援スキル訓練の研究—コンピュータ・シミュレーションを用いた実践教育の展開—」『龍谷大学 国際社会文 summarizing 研究所紀要』龍谷大学国際 社会文化研究所 第6号 2004年 209-224頁
②太田義弘「ソーシャルワークの実践研究とエコシステム構想の課題」『龍谷大学社会学部紀要』龍谷大学社会学部学会 第20号 2002年 7-13頁
7) 太田義弘 野澤正子 中村佐織 他「ソーシャルワーク実践へのエコスカナー開発の研究—支援ツールを用いたスキル訓練の方法—」『龍谷大学 国際社会文化研究所紀要』龍谷大学国際社会文化研究所 第7号 2005年 110-111

頁

- 8) 「エコスキャナー (支援ツール) 活用調査」のデータ集計及び表・グラフは、京都府立大学院博士前期課程の河野高志によって作成されたものである。
- 9) 「エコスキャナー (支援ツール) 活用調査」の自由回答記述についても京都府立大学院博士前期課程の河野高志によってまとめられたもので

ある。

- 10) 質問項目は同じではないが、2002 年 10 月までに 4 大学 129 名からコンピュータ支援ツール (プロトタイプ版) 演習後のアンケート調査を実施した。本書はその一部を掲載している。中村佐織『ソーシャルワーク・アセスメントーコンピュータ教育支援ツールの研究ー』相川書房、2002 年 190～192 頁